



Title	講演記録：生活指導実践の今日的課題
Author(s)	井沼, 淳一郎
Citation	社会教育研究, 40, 59-69
Issue Date	2023-03-24
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/88744">http://hdl.handle.net/2115/88744</a>
Type	bulletin (article)
File Information	004-0913-0373-40.pdf



[Instructions for use](#)

## 講演記録：生活指導実践の今日的課題

井 沼 淳一郎<sup>1</sup>

## はじめに

資料としてすでに配られているかと思いますが、一つは「コロナ禍、不登校最多」という新聞記事です。もう一つは僕の研究会仲間の私学の若手が、2020年、コロナで2月から6月まで全国的に休校になったときに3年生を担当していて書いてもらった作文が資料2「コロナに奪われた高校生の青春」です。これはすでに目を通していただいていることを前提にしてお話させていただきます。

2020年の2月の終わりから突然の学校の休校と分散登校が6月まで続きました。高校3年生になる子どもたちにしたら、受験勉強のスタートする大事な4月、5月、6月にまったく学校に行けない。とても不安だったと思います。同じように高校1年生にとっては、中学校の最後の卒業式ができないままに休校になり、そのまま入学式もできずに過ごし、そしてようやく学校が再開されたとしても、集団的な活動、例えばクラスが仲良くなるための遠足や体育祭、文化祭などの行事も中止、あるいは縮小されてマスクで顔を半分覆って、新たな学校での新たな友だちづくりがままならない中で、高校生活をスタートせざるを得なかったのです。高校2年生は、高校時代の最大のイベントである修学旅行が中止された学校もあったと聞きます。つまり、このコロナに対する全国的な学校の休校という政策的判断というのは、それまで当たり前で過ごしていた学校生活を子どもたちから一瞬にして奪った、そういう出来事だったのです。

そのときに、これも僕の研究会仲間で僕よりも若手、40代のS先生、大阪の学力的にはともしんどい子が集まる私立高校の英語の先生をしている人なのですが、彼は3年の担任として、4月からの休校で新しいクラスがいつ学校に来られるかわからない中で、学級通信を作って始業式のあるはずだった日に郵送したのです。その学級通信を読ませてもらって、僕は非常に感動しました。どんな内容であったか、最初の部分を皆さんに聞いていただきます。「皆さんの気持ちを察すると、申し訳ない気持ちでいっぱいです」。新しいクラスの新しい担任の先生の最初の言葉が「皆さんに申し訳ない」と謝るところから始まる。何を謝ろうとしているのか。本来、新しいクラスで友だちに再会できるとか、3年生になったらどんな学びが待っているのかとか、そういうみんなの希望やワクワクした思い、当たり前の願いが突然かなえられなくなってしまった。コロナだから仕方がない、というふうにも言ってしまうけれども、でも、それで本当にいいのか。休校でも何かできることはないのかと、私たち担任は思い悩みながら皆さんを迎える日を待っているのです、という思いを伝えています。

僕は、コロナを理由に学校行事が縮小されたり、あるいは授業がカットされていく中で、それが子どもの側からどう見えているのかというのを常に考えようとしてきました。今日は、まず生徒指導と生活指導の違いについて話してください、と言われていました。生活指導教師というのは常に子どもの側から学校や生活を考えている、というふうに言ってもいいと思います。僕は研究者ではないので、理論的なことはあまり話せませんが、実践的な点からいうと、生活指導教師と生徒指導教師の違いの一番は、生活指導教師は常に子どもの側から学校を見ようとするところがあると思います。

<sup>1</sup> 全国高校生活指導研究協議会会員の井沼氏により、2022年11月24日に講義「生徒指導論」において行われた講演の記録。紙幅の都合上資料1・2は掲載していない。大阪府立堺東高等学校・教諭

## 1. 生徒指導と生活指導

それでは今日は、大きく1、2、3の三つのことについてお話していきたいと思います。まず1の「生徒指導と生活指導の違い」についてです。皆さんは2022年に発行された文部科学省の生徒指導提要进行を、テキストというか反面教師的に宮崎先生は使っているかもしれませんが、それをベースにしながら生徒指導論を学んできたと思います。この生徒指導提要进行の一番最初のページに、生徒指導とは何か、その定義や目的が書かれています。簡単にいうと、最初の3ページで生徒指導提要进行の一番骨格の部分は示されています。そこには生徒指導は学校生活がすべての子どもにとって充実することと、子どもの社会的資質、行動力、自己指導能力を育てることの二つを目的とする、と書かれています。学校生活がすべての子どもにとって充実したものにするとは、子どもたちを迎える学校がどうあるべきかという学校づくり、いわゆる学校という子どもたちにとっての大事な社会をどうつくるのかという社会的な目標を示していると思います。学校生活、学校という社会がすべての子どもにとって充実した学びの場になるように常に改善していかなければならない。生徒指導の第一の目標はそういう学校づくりである、ということが示されています。そして2点目は、そのような学校づくりの活動を通じて、子どもの社会的な諸能力を育てることを目的とするのだという組み立てで、一人ひとりの社会的能力の育成目標が述べられています。実は生徒指導提要进行でまず述べられる生徒指導の目標は、このように二重構造になっているのです。

続けて生徒指導提要进行では生徒指導の目標を実現していくための方法論として、3点が述べられています。生徒指導というのは教師が決めて押し付けるのではなく、常に子どもの自己選択や意思決定を、教師は学校生活のあらゆる場面で用意する。そして、子どもたちが自分たちで判断したり、意思決定するのに対して、適切なアドバイス・指導援助を行うのだ、と書いています。私は、生活指導の方法論としてよく「やってみせて、やらせてみて、ほめてやらずば人は育たず」という言葉を引用します。連合艦隊司令長官の山本五十六の言葉だそうで、ちょっと軍人の言葉を引用するのはどうかな、と思いつつも、僕は40数年間の生活指導教師をやるときの、本当に基本中の基本はこれだと思ってやってきました。やらせてみて、ほめて、人を育てるということは誰もがやりますが、ポイントは「やってみて」があることなのです。つまり教員は、生徒にやらせるのではなくて、まず生徒の気持ちになって自分でシミュレーションをしてみる。それでどんな気持ちになるかな、どこでつまずくかな、どこが嫌かな、どこが喜ぶのかなと、そういうことに思いを巡らせながら、指導の場を設定していくのだ。そしてそこでやらせてみるのだ、というふうに僕は捉えています。こういう点では、生徒指導提要进行の定義する生徒指導方法論と生活指導の方法論はかなり重なるものだと思います。

では、生徒指導と生活指導は何が違うのかという点ですが、これは現場では決定的に違います。生徒指導というのは現場では教師や大人が示す学校や社会のルールへの適応を求めるような営みであることが多いです。皆さんも自分の中学・高校時代の体験から生徒指導部の先生というのは、たいてい校則を守れという話や交通ルールを守れ、遅刻はするなというように、社会のルールへの適応をよく求めてくる。そういうものが生徒指導だと体験的には思い当たるのではないのでしょうか。ところが生活指導というのは学校への適応を、一人ひとりの子どもに求めるのとは真逆の方向を目指しています。それは子どもたちの社会的諸能力の成長を通じて、学校自体を子どもにとって充実した場になるように、子どもたち自身が変革していく、そういう実践的運動として想定しています。社会に対する適応を求めていくのか、社会そのものをつくり変えていくことを目指すのか。おなじような文言や同じような方法論を使いながら、実は目標とするところはまったく違うところに行こうとしているのが、生徒指導と生活指導の違いだと僕は考えています。

さて、そのような生活指導を進めるために、僕は実践では次の五つのスキルを組み合わせ使いながら、ホームルームや生徒会活動、あるいは部活動を指導してきました。

ホームルームを想定した話になりますが、1つめはホームルームの中に少人数の「班」を編成していました。班は学習や行事などに取り組みながら、まずはそこで親密な関係やクラス一人ひとりの居場所を育てる

ことを目的としています。それと同時に、クラス全体でものごとを決める場面が、文化祭や体育祭、その他いろいろな行事のときに多々あることですが、2つめはそのときの話し合いを総会として位置付けて、クラス総会では討議を通じて、自治と民主主義を学ぶ。みんなが納得した決め事をするために、話し合う経験を積ませるといことがあります。3つめは行事の指導です。行事は文化祭でも体育祭でも、子どもたちがやりたいということをとことん実現しようという方向で、では実現するためにはどのような活動をすればいいのか、とか、どういう組織をつくれればいいのか、を教えながら、さらに全体を見て引っ張ることができるリーダーを育てていく。当然、クラス全体が行事に向けて活動を深め、盛り上がっていくと、人間関係のトラブルやぶつかり合いが、あちらこちらで起きてきます。その時、4つめのスキルとして生活指導教師はトラブルを抑え込むのではなくて、むしろトラブルが起きることをチャンスとみて、そのトラブル、人間関係のトラブル、ぶつかり合いがなぜ起きたのかということ、当事者の子どもとともに彼らの論理、文脈、物語をたどりながら、お互いの関係性のどこに問題があって、どう変えればいいのかということをお話させていきます。トラブルをチャンスにしながら、集団の民主主義的な前進を勝ち取っていくのです。最後の5つ目は、生徒の要求をクラスの中にとどめるだけではなく、例えば文化祭であれば、飲食企画をやりたいがコロナで飲食企画は駄目だ、どうにかできないだろうか、生徒の要求を組織してこうすれば飲食企画ができるのではないですか、と学校へ要求していく。もちろん責任を持って僕らは実行するという自治を基本にして、学校をもっと楽しい場につくり変えていく。社会を変革するといっても、子どもたちのいる世界を少し子どもたちにとって生きやすい場、楽しい場につくり変えていこうとすること、それが生活指導教師が五つのスキルを使って目指していく方向だと思います。

## 2. 生活指導的な授業実践とは

次に、2の生活指導的な授業実践とは、についてお話しします。宮崎先生が10年以上前の僕の実践<sup>2</sup>を、未だに毎年生徒指導論で使っていただけているというのは、とてもくすぐったい気持ちになります。生徒指導というジャンルからみると、授業での生徒指導はどのように書かれているかという、これも生徒指導提要の教科における生徒指導のところにこのように書いてあります。授業における生徒指導は「わかる授業を実感させること」が目標で、そのために行うべき生徒指導は、まずどの生徒にも授業の中の居場所をつくることであり、生徒が受け身ではなく主体的に学ぼうとする態度をとれるようにもっていくことであり、そして一人で学ぶのではなくてグループや仲間と、共に学び合う、教え合ったりする意義や大切さを実感させながら、そのことを通じて何よりも言語力を育てることが目標であるとされています。そして、それにプラスすることは家で宿題をやったりする勉強習慣が付けばもっといいよね、というのが授業における生徒指導の方向として提要では述べられています。

けれども、授業における生徒指導を生活指導の観点から見ると、大きな「？はてな」が湧いてくるのです。それはこういうことです。「わかる」というのはそもそもどういうことなのか。わかる授業をすればそれでいいのか。わかる授業の先には一体何があるのか。よく生徒は「先生、何のために勉強をするの。数学なんてちっともわからん」とか、「英語なんか俺、使わんし」というふうに言います。皆さんも、北大に入る人たちですからとても優秀で、勉強に対するストレスはあまりなかったかもしれませんが、それでも小中高の中で一度や二度は、何のためにこの勉強をするのだろう、ということ考えたことがあったかと思います。実は、生徒指導としての授業、授業の中での生徒指導にはこの問いに答える部分はないのです。では、何のためにわかるのか、わかることの先には何があるのか、ということに関しては、例えば世の中には一つの例

<sup>2</sup> 井沼淳一郎「はたらく・つながる・生きるちからを育てる現代社会」北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター『子ども発達臨床研究センター総合研究企画「生きづらさ」を超えて』2013年、HUSCUPより閲覧可能 (<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/52438>)

として、こんな考え方があふれています。

皆さんの中にも『ドラゴン桜』を受験のときに読んで励まされた人がいるかと思います。我が家でも子どもの受験期に、僕も一緒になって読みました。古いバージョンも読んで、新しいバージョンも、ドラマもテレビも全部見ました。桜木先生のファンでもあります。でも、桜木先生の言うことには「?はてな」と思います。これは学校で勉強ができない子どもたちに桜木先生が言った言葉です。「社会のルールってやつはすべて頭のいいやつが作っているのだ。ルールは頭のいいやつに都合のいいように作られているんだ。お前ら、ルールが嫌だからって無視するんだったら、世の中からさっさと退場しろ。ルールが気に入らなくて、自分の思い通りにしたいんだったら自分でルールを作る側に回れ。ルールを作る側に回るにはどうしたらいいか。手っ取り早い方法はまず東大に入ることだ」。ここから東大一直線の勉強が始まっていくわけです。桜木先生ほど極端には言いませんが、なぜ、何のために勉強をして、大学に行くのかというときに、少しでもいい暮らしをしたいとか、ゆとりが欲しいと同時に、命令されて嫌な仕事をするのではなくて、自分が命令する側に立ちたい、人を動かす側に立ちたいというのは、別に悪い意味ではなくて、よくある価値観だと思うのです。でも、この桜木先生の典型的な答え、今の世の中にあふれる典型的な答えだとは思いますが、ここにも僕は疑問点が二つあります。一つは世の中のルールというのは本当に頭のいいやつ、東大とか京大とかを出て、官僚になった人間だけが作っているのかということです。もう一つ、わかるということは結局は共通テストで高得点を取れるようになるということなのか、ということです。この2点を問いとして頭に置きながら、生活指導的な授業実践の話をしていきたいと思います。

私は今、一応進学校の一番端っこのような中堅の学校に勤務しています。その前に11年勤めた学校は、堺市内でも入試偏差値が一番低いといわれた高校でした。多くの生徒が中退していきました。当時、7クラス280名入学して、卒業するのが200人を切る年もありました。2クラス分、80人の生徒が途中で中退したり、留年したり、不登校になっていくのです。僕が2年生のときに受け持ったH男君とK太君、この2人も2年生で留年して、2回目の2年生で僕のクラスに入ってきました。

H男君はなかなか朝が起きられないということで、午前中の欠席が増えていました。どうしてなのかと探っていくと、父子家庭で、お父さんが病気で生活保護を受けながら彼に頼って生きていたのです。H男君は今で言うところのヤングケアラーだったのです。家のこともしながら、お父さんの病気の面倒も見ながら、自分はアルバイトもして生活保護では足りないお金を家にも入れながら、学校に来ていたわけです。でも、そういう生活を続けていたH男君は、夜なかなか眠れないのです。自分のこの生活が未来までずっと続いていくのか、俺は父親の世話をしながら自分の未来を削っていくのかというふうに思ってしまうわけです。そうすると夜も眠れなくて昼夜逆転して、明け方になってようやく眠るという生活をしていました。

K太君の方は中学校のときはいわゆるヤンキーでした。悪さもいっぱいしました。でも高校に入るときに生まれ変わろうと思って、中学時代の連れを断ち切ってうちの学校に来たのです。ところがそのK太君もなかなか学校に来られない。どうしてかということ、中学校時代の悪い連れに脅されて、お金をせびられていたのです。そのお金が払えなくて、昼間は外へ出られない状態だったのです。

貧困と格差社会の底辺では、弱いもの同士が食い合うことがあるのです。自分よりもっと弱いものを食い物にしてなんとか生き延びようとする、そういう過酷な世界があるのですが、そういうところで生きる子どもたちの現実というものが背景にありました。ですから、前に勤めていた学校の生徒は、3年間でアルバイトを経験する生徒が8割以上いました。ほとんどの生徒は経済的に苦しいから働きたい、と考えて8割ぐらいが働いている。そのアルバイトは、H菜さんの話を書いています、8時間以上、8連勤以上、深夜有り、しかも残業手当は出ないなどという、労働基準法違反のブラックな職場がたくさんあります。こういうアルバイトを大人に言われるままに我慢してこなし、そしてようやく学校に来たときには、朝はもう寝坊して来ない。しんどいから昼から勝手に早退していない。学校にいたと思ったらすやすや寝ている、というような生徒が少なくありませんでした。1年生のときは授業を15分間かせるのが闘いで、まず自分の席に座らせる、

教科書・ノートを出させる、開かせるだけでも時間が15分、20分かかる。ようやく授業に入ることができるというようなことが日常茶飯でした。

2年生のときには学年のボスのいるクラスがあまりにうるさいので怒鳴ったら、そのボスに教科書を、世界史の教科書なのですが、床に叩きつけられました。そのときは僕もカッとして、「教科書を叩きつけるとは何事や!」「教科書は人類に知的財産なんや!粗末に扱うな!」と、こんなことを言っても伝わらないと思ったのですが、思わずそう叫びました。そうしたらボスは何て言い返したか。「教科書なんかなくても勉強はできるんや!」と言ったのです。「どないしてやるんや!」「インターネットがあるやん」というふうには彼は言いました。「おお、そうやったな。インターネットで調べてきて授業をやってみろよ」と売り言葉に買い言葉で、1週間後に学年のボスが僕に代わって、アメリカインディオの歴史をやってくれたことがあります。もちろん、教師とは違いますから、教室の前に立って自分が調べてきたことを一生懸命しゃべっても、15分と持ちませんでした。それで僕は内心「勝った!」と思いつつ、でも彼がたどどしく授業をしながら、ぼそとこう言ったのです。「これって俺的には面白いねんけどな」と、マチュピチュ遺跡の発見のことを話してくれたのです。僕はそのときにハッと思ったのです。本当に面白い、学びたいと思うことだったら、彼らは自分から勉強するんだ。そうだとしたら、カリキュラムに入っているからとか、教科書に載っているからではなくて、本当に彼らが学びたい、必要だと思うような学ぶ内容を作れないだろうか、ということを考えるようになったのです。

手っ取り早く、彼らが何に興味があるかといったら、それはまずバイトの時給でした。ですから、彼らが3年生になったときの現代社会—1年間、週に2時間やるのですが、そこでは労働法を徹底して教えるという授業を始めました。皆さん、配布したプリントに「いきなり、労働法クイズ!!」10問を載せているので、イエスかノーで答えてみましょう。ちょうど30分ほどしゃべりましたから、ちょっと眠たくなってきた人もいでしょう。お疲れの人もいでしょう。ワークタイムにしましょう。今から3分間、時間を取ります。隣の人と見せ合いながらやっています。相談しながらでいいので10問。イエス・ノーで。4番は北海道の最低賃金、これは〇円、と答えてください。あとはイエス・ノーで答えてください。(クイズのシンキングタイム)

答えを出しますか。正解した人、手を挙げてください。全問正解者、いない?本当に?高校生より駄目やん。残念やなー。全問正解者には宮崎先生から豪華プレゼントがもらえると聞いていたのに。これは冗談ですよ。

こういうクイズをやりながら、彼らが本当に食いついてくる授業を1年間やってみようと思って始めたのです。ただ、この「いきなり、労働法クイズ!!」というのは食いつきは最初いいのだけれど、やがて生徒たちは飽きて寝始めるのです。なぜかという、最初は「おお、ほんま!」とか「先生、アルバイトでも有休あるの?」とか「時給計算ってうちのバイトなんか30分単位やで」とか「クビにされたら30日分もバイト代をもらえるの?」とか、最初は喜ぶのです。でも、そのうち飽きて寝始めるのです。「なんで?」と聞いたら、「でもそんなのうちのバイト先は無理やし。店長に言われへんし」というふうな、みんな諦めてしまうのです。知識を教えているだけでは駄目なのです。そこで、アルバイトの雇用契約書をもらって議論する授業を始めました。

どんなアルバイトでも雇用契約書を出さなければいけないというルールになっています。雇用契約書を紙で渡していない場合は、悪質な場合は40万円の罰金になることもあるそうです。そう言うので生徒は、「先生、そうしたら俺は40万円もらえるの?」と言うのですが、「交通違反と同じで、国に入るだけやで」と言ったら、「なんや、それやったらいらんわ」となります。彼らには、アルバイトの雇用契約書というのは何が書いてあるのかわからない紙なのです。ですから、たいていはもらってもなくしたか、あるいはもらったかどうかの記憶がなかったり、さらに言うと、高校生を雇うアルバイト先の経営者や雇用する側の人間がそういう契約書を作らなければいけないということすら知らなかったりする。「アルバイトの契約書を持ってき

てごらん」と言って、200人くらい教えていて、持ってこられたのは10数名でした。生徒からは「そんなバイト先に契約書くださいと言ったら、気まずくならへん？関係が悪くならへん？」という心配が出されました。実は僕も自信がなかったので、友人の弁護士さんに相談をしたら、「いいよ、どんどんやって」と。「それで何か言われたら、俺が出るから。高校生の場合は無料で、サービスで行くから」と言ってくれたので、踏み切ってやってみました。そうしたら、校長先生がこの授業は面白いということで、2年目から「学校の授業で使うので雇用契約書を渡してやってください」とわざわざ校長名のお願ひ文を出してくれるようになりました。

そういうこともあって、4年ほど続けてこの授業をすることができました。いろいろなバイト先があって、雇用契約書を快く出してもらえる生徒もいれば、逆ギレされるようなケースもありました。でも、もらえなくても、ものを取りることが目標ではなくて、もらえなかったそのやり取りをレポートして、みんなでどこがおかしいのかを考えることが、実は勉強になりました。

そういう中で、結論的に言うと、アルバイトをしている高校生が、アルバイトを雇っている大人とけっこう対等な関係に近づいていけたのです。例えば、最低賃金に違反しているバイト先が5つあったのですが、契約書をもらうだけでこれがすべて改善されました。ひどいところになると、契約書の最低賃金違反の数字を二重線で消して、その上に最低賃金を書いて渡してきました。「先生、これって学校の授業でやると言わなかったら、店長はわかっているくせに知らん顔していたんやな」「そういうことやね」というふうな職場もありました。

「知る」ことは大切です。でも、知っているだけでは世の中は変わりません。社会は変わりません。本当に大切なことは、知識を使って世界に参加すること、行動してみることだと思うのです。授業というのは、よく高校生はまだ子どもだから大人になるための勉強で、大人になってからのために今は知識を身に付けなさい、といいますが、そういう知識は、結局は大人になってからもあまり使わないのです。知識というのは、学んでそれをすぐに使ってみて、それで世界に参加してみても初めて価値がわかったり、修正したりすることができるのだと思います。

そういうスタイルの授業を始めると、例えばスーパーで働くAさんは活発で物怖じしないタイプの子で、バイト先が最低賃金を満たしていないことを知って、すぐに店長に文句を言いに行くつもりでした。でも、同じスーパーで働くパートのおばちゃんたちが、「ちょっと待ち」と引き留めてくれて、おばちゃんたちと相談して、まずパートのおばちゃんたちと売り場の会議にかけてもらって、売り場主任に最低賃金違反だから上げてほしいと伝えて、今度は売り場主任が集まる会議で店長にそれを伝えて、そこからエリアマネージャーにあげてもらってというかたちをとったのです。そうすると、Aさんの賃金が最低賃金に改善されるだけではなくて、パートのおばちゃんたちもみんな給料がアップになって、とても喜ばれたということがありました。Aさんは、「社会の上下関係を崩さずに事を進めるやり方が今回わかった。いい勉強になった」とレポートしてくれました。

ホカ弁で2年以上働いているHさんは、他の授業はまったくやる気がなくて、テストも欠点ぎりぎりだったりするのですが、その彼女が僕の授業は一生懸命受けていました。でも、あるときからノートを毎回忘れるのです。僕は現代社会のノートを「10年ノート」と名付けて、「君らが10年間パートとかアルバイトでも、絶対に食いつぶぐれしないように生きていけるような知識を全部盛り込むから、10年持っておいてや」と言っていました。その大切な「10年ノート」をあるときから授業で毎回忘れるのです。「なんで、そんなにノートを持ってこないの？」と聞いたら「店長に貸したら、店長が返してくれないんです」と言うのです。それから1カ月くらい経ったときに、店長が新しい労働契約書、ちゃんとした契約書を作って彼女に渡してくれ、「すごい勉強になったわ。ありがとうね」と感謝されたそうです。知識を使って社会に参加すると、高校生のアルバイトが、一応一人前の労働者として対等に扱われていくのです。そういう、本来、それが当たり前だったはずの世界が見えてくるわけです。

行動することはとても大切です。でも一人で闇雲に行動するのではなく、一人では社会が変わらないから、補い合いながら、助け合える仲間をつくっていくということが大事だということがわかってきました。ただ、このことは言うは易し、行うは難しで、特に以前の学校のように勉強が苦手で、できたら授業はつぶれてほしいと思っている子が多い中で、助け合ったり補い合ったりするグループ学習はなかなか難しいのです。座らせるだけで精一杯という授業がいっぱいあるのです。その中で僕はやれると確信を持ったのは、実は授業の壊し屋のC子とS子から学んだことでした。

このC子とS子はどんな話をしても全然乗ってこなくて、自分たちの話したいことをペラペラといつもおしゃべりしていました。ハローワークの使い方の授業をしたときに、あまりにC子が乗ってこないのは僕ももうキレそうになって、「C子！」というふうに声を荒げたら、突然、S子が「先生、ハローワークって何？」と割り込んできたのです。このような割り込みの質問に答えないと、今度はS子がぶちギレしてしまうので、C子への話をやめてS子にハローワークの説明をもう1回しました。そうするとそれを聞いていたC子が、「行けへん、そんなとこ」と言うのです。「なんで？」「そんなもん行かんでも、ケタイでバイト検索したらいいやん。」これはまだスマホがない時代の話です。それで私は「いやいや、ハローワークに行ったらパソコンがあって、そこにもっといっぱい情報が詳しく入ってんねん」とC子を説得しようとしたのですが、またS子が割り込んでくるのです。「先生、アルバイトとパートの違いって何？」「それもさっき話をしたよね」と言いながらも1回説明して、「ハローワークというのは基本的には高校生のアルバイトを紹介してくれへんけどな」と言うと、S子は「えっ、私ハローワークでバイト探したで」と言うのです。あまりに話が横道にそれていくので、僕も少々キレ気味になって、S子はスカートは短いし、髪の毛は茶色いし、化粧は濃いしで、「お前はケバいから高校生に思われなかつただけやろ」と切り上げようと思いました。S子は、そんな私におかまいなくC子に向かって「簡単やで。パソコンの画面にタッチしていったらええだけや」と続けたのです。僕はそのときになってやっと「あつ」と思いました。S子は僕に怒られそうになるC子をなんとかかばって、C子に「ハローワークって役に立つで」ということを伝えたかったんだ、と。彼女たちは壊し屋ではなくて、なんとか友だちの力になりたいと思っているんだ。そこを引っ張り出せばいいんだな、ということがわかってきました。それからは少々「先生、おもしろい。今日はもう授業は嫌や」と言っても「はいはい、そうですか。じゃあみんなできやろね」というふうにして、グループワークをどんどん取り入れていきました。

次のB子さんのバイト先というのは実は伝説的なバイト先で、契約書はくれない、最低賃金守らないどころか、学校の宿題で出さなければいけないから欲しいと言ったら、「お前、先生に言っとけ。そんなことをやっている先生はどうせ井沼とかいう先生やろ」と。数年やっていると、地域の経営者に僕の名前が知られているのです。「井沼に言っとけ。世の中っていうのは、法律通りになんかいつてないんや。いらんこと教えんでええねんって言っとけ」と、本当にバイトのB子さんに言ったらしいのです。B子はもうブンブン怒っていて、「面白いからそのやり取りをレポートにしてよ」と頼んで書いてもらったレポートを「よし、じゃあこれでロールプレイの台本を作るわ」と、ロールプレイの台本にしたのがこの文章です。実際のやり取りでも社長は「契約書なんてない」と言ったら事務のおばちゃんが後でこっそり「B子ちゃん、ほらこれあんたの契約書やで」と社長に黙って渡してくれた。そうしたら違反だらけ、不備だらけの契約書だったので。それを持って社長に文句を言ったら、「何を言っているんや。お前、契約書を学校の授業なんかに出さへんやろな」と社長はうろたえたそうです。B子さんは「出さへんよ」と安心させておいて、実は学校に出して暴露してくれたわけです。このロールプレイ台本を、社長役や事務員役とかの役割を決めて、大笑いしながら寸劇風にやった上で、「さて、B子は契約書も不備だらけやし、最低賃金は改善されないままやけど、B子と社長とどっちが有利になっているんやろ」と議論をしました。僕は一定の程度で、「結局、最低賃金が改善されていないからB子さん不利やな」となるかと思ったら、そんなことはなくて、「B子は気持ち的には社長に勝っているよね」とか「事務のおばちゃんを味方に付けているもんね」とかいろいろな意見が出

てきたのです。なるほどな、仲間をつくるということはこういうことなんだな、と思いました。それと同時にこの授業を見学していた弁護士さんが、「世の中は確かに法律通りに全部はなりません。でも訳もわからずに理不尽なことに従わされるのと、訳がわかって今は我慢して従っておこうとするのでは全然違いますよね」と教えてくれました。そういう意味で、決してものとりではなくて、契約書をもらってみることで起きるいろいろな人間関係の展開こそが、学びの材料となったわけです。

生活指導的な授業実践というのは、〈わかる授業〉を実感させるの前にこんな文を補えば伝わるかと思います。「世界に参加し、世界は変えられることが〈わかる授業〉を実感させる」と。僕は特に社会なので、そういうことを意識して授業をつくってきました。例えば工学部とか理学部の学生さんから「僕は数学を教えるのですが、そういう社会を変えられることは遠いのですが、どうしたらいいのですか」という質問があるのですが、それはそれで、数学が世の中でどんなふうに使われているかを考えて、世界に参加し世界を変えるための学びをつくってくれたら、と思います。

生徒指導提要の生徒指導の5つの方針を、僕なりに読み変えてみました。授業の場では、いろいろな生徒の言葉のワケ、その背景にある生活の課題や生活の中での彼らを支えている良さなどを探ること。主体的な学びの「態度」を育成するのではなく、主体的に参加し、要求し、行動する中で主体的に考えるようにすること。態度主義ではないということです。3点目はほぼ同じです。4点目は、言語力は何のためかといえば、それは世界と自分とのつながりをちゃんと言語化して、客観視して、人に語れるようになるためということ。「わけもわからずにさせられている」から、「わけがわかってする」に変わるということです。これは大きな一歩になると思います。そして、発展的な学習とは宿題をやらせるのではなくて、授業では学びきれないことを発展的に取り組む意欲を持たせていくことです。「雇用契約書をもらってみる」授業は、やがて店長の過労死度チェックインタビューに発展し、バイトの高校生が店長にインタビューする中で、その職場の働く環境の問題性を店長と共有していくような発展を見せてくれました。

現場教師、生活指導的な授業のつくり方は、上からの学習指導要領があって、検定合格教科書があって、共通テストの入試に出るからそこから内容を決めていくのではなくて、現実の社会からそこで生活している子どもたちの不満や悩み、生活を支えている面を知り、本当にそれに役立つような授業をつくっていくのが特徴です。そして、同時に、生活指導的な授業実践は、単に生徒が行動し、社会を変えていくだけではなくて、そこに伴走することで教師自身が自分の指導の検討を迫られ、自分の指導をも発展させる相互的な学びの授業になるのです。

例えば労働三権・団結権・団体交渉権・団体行動権、皆さん当然ご存じですよ。説明しろと言われたら、団結権というのは労働組合をつくる、団体交渉権というのは会社側と交渉する、それを拒否したら駄目だ、不当労働行為になるとか、教科書的にはそういうことを学びます。でも、それを勉強が嫌いな生徒にそのまま話をしても何も入っていかないのです。僕はこの授業を通じて、団結とは組合をつくることではなくて、困っている友だちを見たら話し合ったり助け合ったりする、それこそが団結権の行使なのではないのかということ、C子とS子から教わりました。さらにバイト先の店長にノートを借りパクされていたHさんは、立場の違う相手と話し合っ、新たな契約書を作るという合意をつくってきたとも言えます。まさにこれは彼女は意識せずに団体交渉をしてきたことになるのだなと思いました。また、団体行動とはデモやストライキをすることだけではなくて、例えば法律違反が改善されなかったときに、ロールプレイを通してB子が次にどうすればいいのかをみんなと相談することも団体行動することなのではないのか、と僕は捉え直すことができました。まさに生徒たちの生活を僕も一緒にくぐる中で、僕の知識が生活の中で豊かに発展していったのだと思っています。

30分残すと言いながら、もう残り27分になりました。どんな感じかだけ、1分間だけ授業の様子を見せませす。これは、なんで日本は自殺者が3万人を超え続けているのかについてみんなで考え合う授業をした場面です。(動画再生)

### 3. 生活指導実践の今日的課題

最後になります。生活指導実践の今日的課題について語れということでしたので、僕なりに感じていることを語ります。不登校がコロナ禍で最多になったという新聞記事がありましたが、実はコロナ以前から心と体を病む生徒たちは増え続けています。僕が5年前に担任した1年生のクラスでは、吐き気や頭痛、倦怠感に悩み、教室になかなか入れないMさんとか、学校には来るのだけれども朝からトイレにこもりっぱなしで、放課後までトイレの中で過ごすIさんとか、150キロの巨漢のF君は、実は自分の体臭が気になってみんなから体臭が臭いと思われているのではないかということを経験して学校に来られなくなったり、なんとクラスに6人も不登校傾向の生徒がいて、対応に走り回りました。最終的には6人ともなんとかクラスの中に仲間ができて、話せる場ができていきました。でも2年生から3年生になるときに、駄目でやめていった子もいます。

なんでこんなに心や体を病む子どもたちが増えたのか。今、学校というのは、僕のは40年の経験の中で最も息苦しい時代になっていると思います。全国学力テスト、これが2007年に始まりました。全国学力テストの点数を上げるために、都道府県が競い合っただり、ドリル的な学習、いってみればテスト勉強の繰り返しが小学校、中学校に広がっていったのです。教育産業の方は学力向上を目的として学習アプリ、スタディサプリとかいろいろありますが、ああいうものを売り込みます。これも基本的には短い時間で単純なことをわかってドリル的に繰り返して勉強するといったものです。3点目は人材開発型・訓練型の教育観の浸透です。PDCAサイクルということを経験したことがあるかと思いますが、今はもう高校生は高校に入学した途端に、「君は将来何になりたいのか、そのためにはどこの大学の何学部に行くべきなのか、逆算的に考えて高校1年のときに何の勉強をどれくらいしなければならぬのか考えなさい」ということを、学習手帳なんかを一人ひとり持たされたりしてなれば強制されるのです。そんなふうには、高校に入って高校生活を楽しむ前に、もう10年先を考えて、今何をすべきかということに追い立てられていくわけです。個別最適化というのは、最近、経済産業省や文部科学省がよくいうようになってきましたが、要は1人1台のパソコンを与えて、そこで自分の進路に合わせた勉強をさせなさいということです。ますますドリル型、逆算型の学習観が広まっていくと思います。先生方も、特に大阪府は2007年から授業アンケートの結果、それをボーナスに反映させることが始まり、査定が低い先生のボーナスが削られて、上の先生にくっ付けられるという、そういうひどいことが起きています。そのような中で、生徒の成績を上げさせるとか、授業アンケートで評判を良くするというのに、教師が一定程度心を砕かなければならぬようになってきました。逆らえない空気。これはすべて生徒のためだ、チーム学校のためだ、〇高の生徒ならばせめてこれくらいできるようなスタンダードを守ってもらわなくては困る、などなど…仕事はどんどん増えていくし、生徒たちもどんどん宿題が増えていくのです。

こういう変化は、実は私が今勤めている学校だけではなく、最近20年間の教育政策の動向を見ていくと、やはり冷戦終了以降のグローバル化の中で、学校というのが生き残りをかけて勉強をするところ、サバイバルゲームのような「生きる力」論であるとか「脱ゆとり」が言われる中で、学校がそういう場所へと変化してきたことがわかります。さらに、今年から高校では学習指導要領の改訂で観点別評価が入りました。これがまた大変で、主体的な学習に向かう態度を評価しなさいというようなことがあって、今年成績をつける手間が普段の3倍くらい、みんな本当に労働時間が延びています。こういうような学力観の変化とともに、高校で強迫的に学ばなければ自分の未来はない、というふうな将来観とか人生観というものがつくられているのです。

もう一つ、皆さんに伝えたいのは、最近の20年間の社会の変化です。左側に大きく社会的な出来事を、右側に子どもの世界で起きた事件等を並べてあります。また、新しく出てきた言葉、ヤングケアラーとか親ガチャがいつくらいから使われるようになったかということをもとめています。2008年のリーマンショック、年越し派遣村を子どものときにテレビの映像で見たことを覚えている人もいるかもしれません。派遣切りされて持ち金が底をついた人たちが、東京の日比谷公園の炊き出しに集まる、そんな人たちを支える中心にい

たのが、宇都宮健児という人権派の弁護士でした。宇都宮さんはやがて日弁連の会長になりますが、実は先ほどの公開授業にも来てくれて、生徒たちと交じって僕の授業を受けてくれました。

それから、2011年の東北大地震がありました。この頃から日本の社会というのは分断されて、格差社会を増長する言葉、ロスジェネ、ワーキングプア、ネットカフェ難民、勝ち組負け組、機能不全家族などなどの言葉がたくさん出てくるようになりました。それと同時に、自分を包んでくれていた地域や共同体的な温かさのようなものは、震災で引越しを余儀なくされたことに象徴されるように、大きく分断されていくのです。まさにこの20年は、子どもにとったら格差、貧困、暴力、それから自殺が渦巻くような時代なのです。2010年代、いじめ、不登校、10代の自殺者数は、ずっと増加が続いています。今年も増加しています。このように、子どもの生きる環境が本当にひどいものになってきた20年間なのです。

こういう中で、実は生活指導にも今までにない困難が生じてきているのが事実です。それを五つ、先ほど五つのスキルと言いましたが、その五つがこれまで通りにうまく機能しないことについて話します。時間がないので象徴的なことを言えば、スマホの人間関係って、皆さんは感じませんか。論理的な長い言葉のやり取りはしないで、短文応答、感覚的な生理的な反応、そして相手を嫌にさせないお約束重視、不快感を生まないようなところでの立ち回り。そのようなスマホの人間関係に満たされていくと、何も決まらないのです。一つ決めるということが、それを嫌だと思う人がいるかもしれないと思うから、結局誰も決断ができない。それは総会の場面などでも、空気を読むババ抜き人間ばかりの集まりで、自分がババを引かないように、責任は引き受けないように、自分だけ損をしないように、楽しそうにおしゃべりしているように見えながら、実はみんな立ち回っているのです。そういう中で、やはりリーダーが育ってこない現実があります。さらにトラブルが起きたら、これもスマホの人間関係の象徴なのかもしれないのですが、自分が退場する、グループから自分が消えるか相手を削除するか。対立や矛盾を、なぜそうなったのかと文節化して、ではどこを変えたらいいのかという丁寧な話し合いがなかなかできないのです。結果として自分が消えるか、相手を消すか、消えられない自分の心身の不調になっていくというような生徒が少なくないと思います。それから要求実践活動にしても、PDCAサイクルの中で、とにかく今やるべきことは何かを要求され続けると、自分のことすらちゃんとできていないのに何を要求するのだ、というような、自分のことがちゃんとやれない人間は社会に対して要求するのはおこがましいというような空気感が生まれてきます。その中で子どもたちも、小さな願いというものをなかなか表に出せない、出しても取り上げてもらえないという現実があります。

このような生活指導の困難を前にして、今の喫緊の課題は何なのかということです。いろいろありますが、最後に「Fの今後を考える会」の話をしします。

自分の体臭が気になって人から嫌われているのではないかとあって学校に行けなくなったF君なのですが、最終的には出席時間数が足りなくなって卒業できないことになりました。そのときに、K、T、Y、SというFとは仲良くもあり、また体臭のことでからかって生徒指導部長に怒られたこともあるメンバーに集ってもらい、「Fはこのままやったら卒業できへんけど、どうしたらええかな」という話し合いを持ちました。S君は自分も起立性障害で欠席が増えて卒業ができなくなりそうな子だったのですが、その子が「自分もめまいで朝起きるのが辛いねん、一緒に頑張ろう」と声をかけたり、TやYは聞かれもしないのに、自分がサボって親に怒られた話や転校して新しい中学校に行きにくかった体験を語ってくれました。そんな話しあいの中で、Fはもう時間数はオーバーしてしまったけれど、できるだけ頑張って最後までみんなと一緒にいる、と言って、その後休まずに登校することができました。

しかし、この実践は、最終的には僕は不十分だったと思っています。なぜなら、心や体を病む生徒を増やしている学校の在り方を問うところまではいかなかったからです。結局、辛い学校をみんなで我慢し合いながら、励まし合いながら生きていくというところにとどまりました。学校自体がどうしたら生きやすい場になるのか、作り変えるまではいかなかったと思っています。そういう点で、生活指導実践というのは、これで終わり、というのではないのです。

## おわりに

僕は41年間、平教師をずっとやってきました。途中で教頭や校長にならないのか、という話もありましたが、全部蹴りました。なぜかというと、授業ができない、担任ができない、クラブを持ってない、それで何が楽しいのですか、というふうに思ってきたからです。生活指導実践には終わりが無いのです。これでやりきったから管理職になろうか、というふうにしたことは一度もありませんでした。今の時代に、本当に必要な学びや学校生活は、時代が変われば変わってきます。その中で学校をどう変えていくか。いつも迷いながら「これでは学校を変えるまでにいかなかったかな」などと反省もしながらここまで来ました。本当に生活指導というのは飽きることの無い仕事です。僕の今日のお話はすごく端折って飛ばし飛ばしになりましたが、皆さんの中から次の世代、学校の教員になろうというふうに分けてくれる人がいたとしたら、こんなに面白い仕事のバトンを渡すことができれば、と願っています。